

平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > ダイジェスト版

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

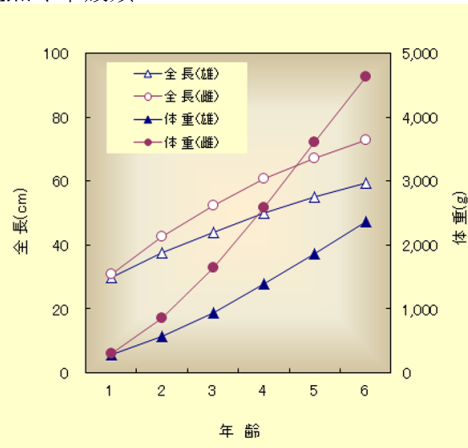
系群名 太平洋北部系群

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命: 雄10歳以上、雌20歳以上
成熟開始年齢: 雄2歳以上、雌3歳以上
産卵期・産卵場: 5～9月(盛期6～8月)、沿岸各地の粗砂および砂礫地帯(水深20～50m)
索餌期・索餌場: 沿岸各地の水深30m以深の陸棚
食性: 着底稚魚はアミ類、全長10cm以上は魚類やイカ類
捕食者: 着底直後の稚魚は大型魚や甲殻類

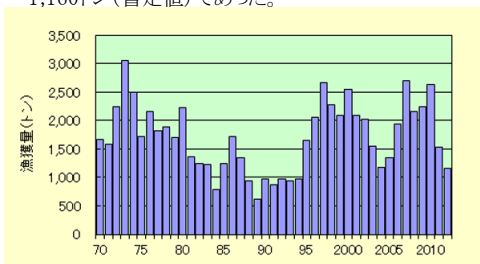


漁業の特徴

小型底びき網、刺網、定置網、沖合底びき網等により周年漁獲されている。漁法により漁獲物の体長組成は異なるが、全般的に全長50cm以下(1+、2+歳)が漁獲物の大半を占める。資源保護と管理を目的とした水揚げ物の全長制限(30または35cm以上)が、各県で実施されている。また、各県において種苗放流が行われている。2011年の東日本大震災の影響で、漁獲努力量、放流量ともに大幅に減少している。

漁獲の動向

1988～1994年の漁獲量は、1,000トン弱程度で推移していたが、1995年以降は増加傾向を示し、1997年には2,674トンに達した。2000年以降減少し、2004年は1,170トンに落ち込んだ。2005年から再び増加し、2006年以降はほぼ2,000トン以上を維持していた。2011年以降、東日本大震災の影響で漁獲量は大幅に減少した。2012年漁獲量は約1,160トン(暫定値)であった。

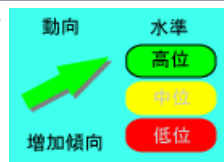


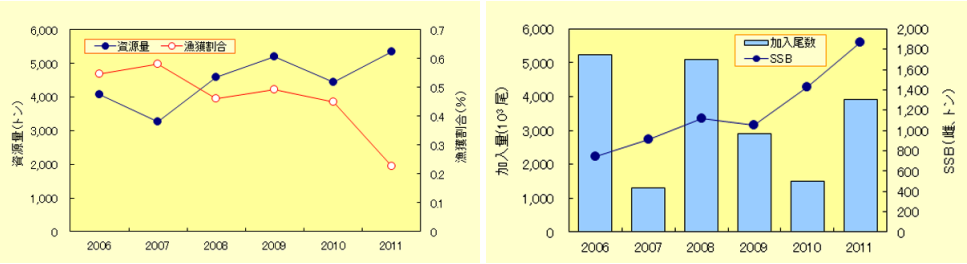
資源評価法

2006～2011漁期年度(7月～翌年6月)における宮城県、福島県、茨城県の水揚げ物全長組成を半年ごと(7～12月、1～6月)に集計して、該当する期間に得られた標本で作製した性別age-length keyを用いて、雌雄別年齢別漁獲尾数を算定した。年度で集計し、雌雄別にコホート解析を行い、雌雄別年齢別の資源尾数を推定した。2006～2009年の資源量推定値の比を用いて、系群全体に引き延ばした。

資源状態

本系群の資源量は1歳時の漁獲加入量の影響を強く受け、10年程度の周期で変動している。資源量の増減は、漁獲量に反映されている。近年では、2005、2007年度に卓越年級(それぞれ2006、2008年度に加入)が発生し、2010年級の資源水準も高いため、2006年度以降の資源量は高水準である。なお、本年より資源量推定方法を変更したことに伴い、資源量推定値は従来の65%程度に下方修正されたが、変動の傾向はよく再現された。





管理方策

卓越年級であった2005、2007年級および2010年級の高い豊度に依存して、現在(2011漁期年度当初)の資源量は高位水準である。また、産卵親魚量も1990年度以降最高の水準にある。このことより、現在の漁獲圧を維持しても、当面は1990年以降の平均的な資源水準を維持できると考えられる。したがって、 F_{limit} として $F_{current}$ (ただし東日本大震災前の2007～2009年度の平均値とした)を、 F_{target} として $0.8 \times F_{current}$ を用いてABCを算出した。漁獲物の全長制限は、親魚量の維持と資源の有効利用の観点から重要であると考えられる。

	2014年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	3.81千トン	F2007-2009	0.67	44%
ABCTarget	3.25千トン	0.8F2007-2009	0.54	38%

- ABCは10トン未満を四捨五入した値
- ABC、F、漁獲割合は漁期年度(7月～翌年6月)の値
- Fは各年齢のFの平均値
- F2007-2009は2007～2009漁期年度の平均値

資源評価のまとめ

- 近年の資源水準は高位、動向は増加
- 最近6年間(2006～2011年度)では、2005年級、2007年級、および2010年級の豊度が非常に高い
- 2010年度の親魚量は高い水準であった

管理方策まとめ

- 資源量を1990年度以降の平均的なレベルに維持するために、漁獲圧を現状程度にする
- 水揚げ物の全長制限を今後も維持する

執筆者: 栗田 豊・玉手 剛・伊藤正木

資源評価は毎年更新されます。